ル　ー　ツ　を　探　る

33期生

Ⅰ　テーマ設定の理由

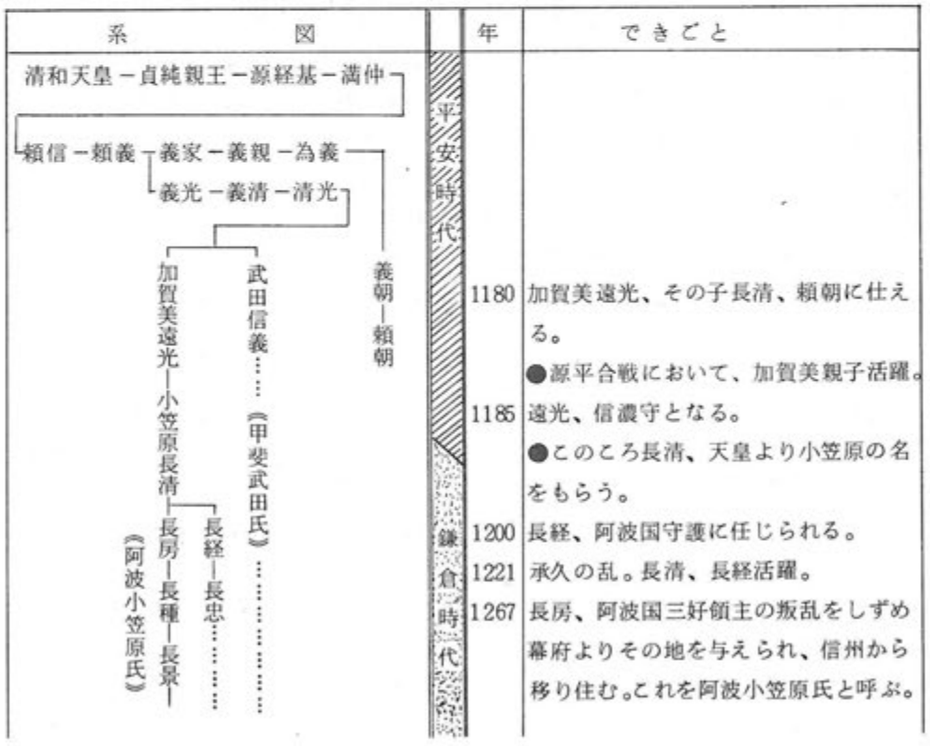
ひところ、ルーツの調査がブームをよんだのを　みなさんおぼえていますか。だれだって自分の家の過去にはある程度の興味をもっているものです。特に、父から次のような、非常に興味深い情報を入手したばかりの私にとって、それはすばらしく魅力的なもののように思えました。「わが家は清和源氏小笠原一族の末裔である」……　そこで私は、おくればせながらもそのルーツ調べにこの夏休みを費やすことにしたのです。

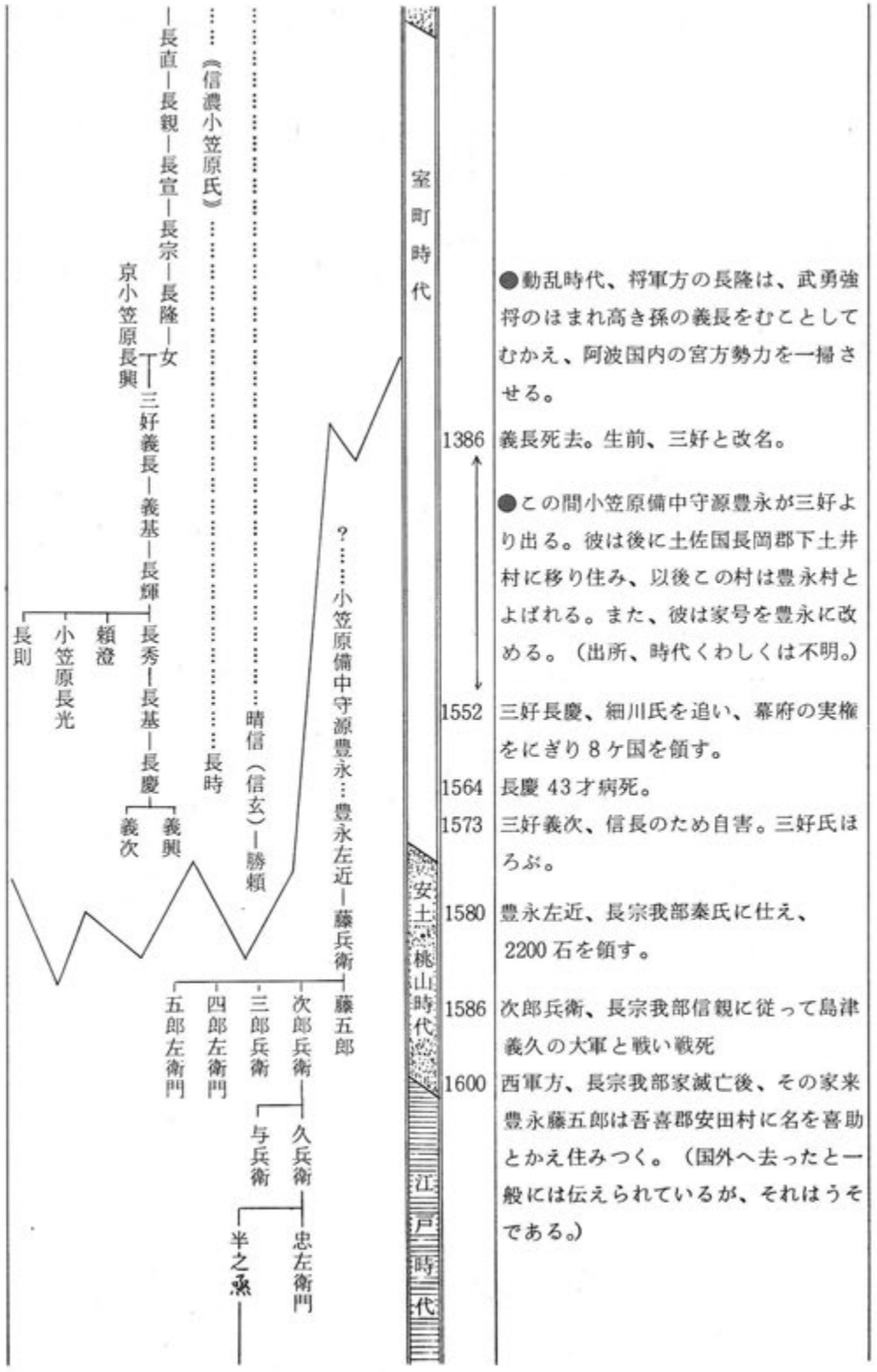
Ⅱ　調査方法

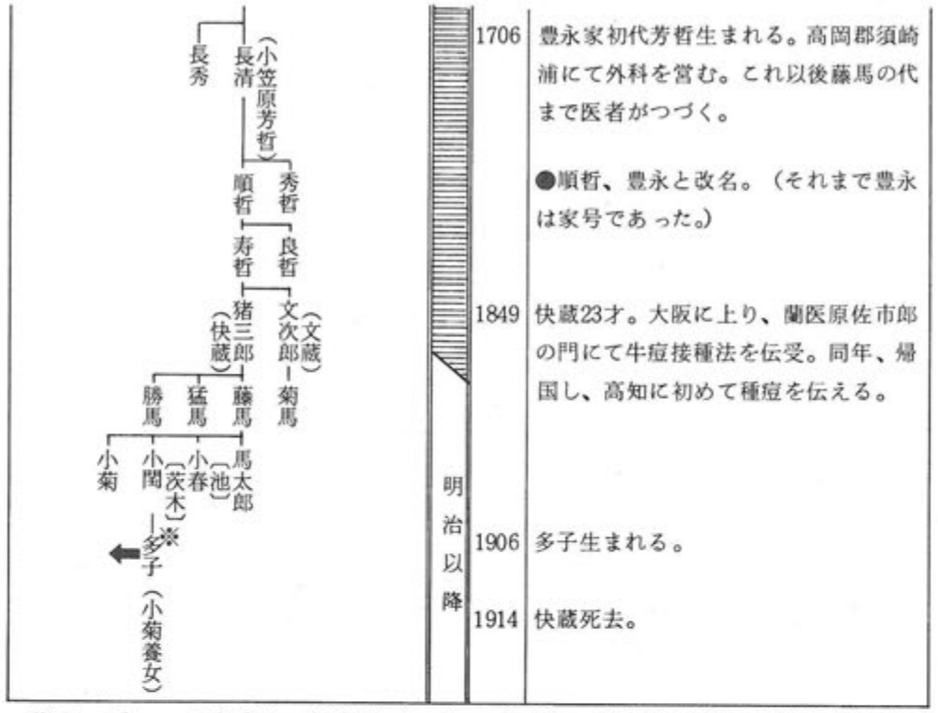
まず、府立図書館へ行って、「豊永」、「小笠原」に関する資料をただ漠然と集めた。また、祖母や親戚の家から、代々伝わる資料を借り、それら全ての資料を自分なりに解釈してまとめ、次の結果にあらわした。（この場合、家に代々伝わる資料を最も信用してまとめた。）

Ⅲ　調査結果

(1)　スペース不足のため系図を年表にまとめて書いてみた。

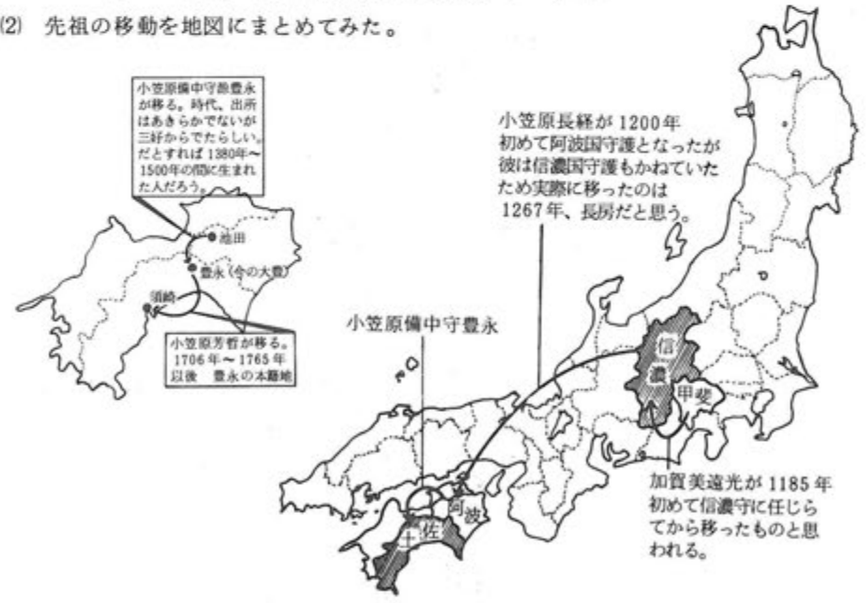






◦注意　ア）……の部分は、省略したところ。（ただし、備中守の前後の点線は不明をあらわしたものである。）
イ）〔　　〕内の名前は、その女性が嫁いだ先の名前。
ウ）※の多子は私の父方の祖母である。
エ）この系図には、主要な人物しか記していない。

(2)　先祖の移動を地図にまとめてみた。



(3)　その他

①小笠原氏

分布の全国的、分流の多大、史上における活動、どれも武田氏に劣らず、天下の大族であった。現在も、小笠原という名はいたるところにあるが、みな、もとをたどれば同一族で、このようなケースはとてもめずらしいそうだ。ちなみに本家の信濃小笠原氏は1543年、武田信玄にほろぼされた。

②小笠原太郎長房

ちょっと系図を見てほしい。この図では、長房は長清の次男、つまり長経の弟となっている。（この部分だけは、小笠原家自身の系図を忠実に写しとった。）しかし、色々と他の資料を調べてみると……実は、彼こそが長経の実の長男だったということがわかってくる。つまり、長経は、何らかの理由で長房を後継ぎにしたくないと考え、その弟、長忠を長男にむかえたのである。私は、資料よりその理由を、長房の母が家女房、つまり女中のような身分であったことをいやがって、彼を父長清のもとへ養子に出し、本妻の息子、長忠を長男にたてた、と最も単純に推理した。この長房は、後に長経より、阿波守護職をつくが、彼が、実際に阿波にうつり住み、阿波小笠原氏と呼ばれるまでのいきさつについては年表1267年事項のとおりである。

③小笠備中守豊永

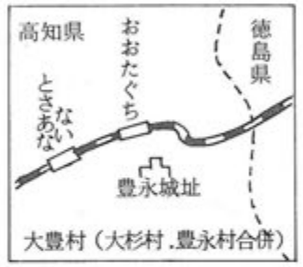
この備中守以後の系図は、それまでのように資料をつぎあわせて作ったものではなく、現在家にある書籍をそのまま写したもので、その書籍では、備中守の時代や出所は不明となっている。しかし、阿波の三好氏出身であることはまちがえなく、いつのころからか土佐国長岡郡下土井村に住みつき、以後、その村は彼にちなんで豊永村と呼ばれるようになったそうだ。そこで私は備中守の時代と出所について次のような推測をたててみた。彼が三好から出たということは、彼は三好義長から豊永左近までの時代、つまり1380年～1500年の間に生まれたことになる。ところで三好氏の中で、小笠原備中守豊永が出た可能性が最も強いのは、長輝の三男、小笠原と改名した長光の家系である。他の支流も小笠原と改名する可能性はあることはあるが、ここでは、まず、備中守は長光より出たと仮定して話をすすめてみよう。もし、そうなると、備中守の生まれた時代は約1495年～1500年の間にしぼられてくる。つまり、系図が、長光－備中守－左近と、切れ目なくつづくことになるのだ。ところで、備中守が下土井村に移った時代だが、彼の一族の三好氏がほろんだ1573年以降とは考えられないだろうか。そうであれば、左近の父が備中守であるということが、時代的に証明され、備中守が土佐へ移り住んだ理由も納得できる。

④豊永城

豊永郷にあった城の名である。この郷に下った最初の豊永氏は小笠原備中守豊永であり、彼がこの地に初めて豊永という名をもたらしたのであるから、豊永城の城主は、彼か、またはその子孫と考えて、まずまちがいはないだろう。その中で有力なのは、豊永左近だ。彼は、1580年、長宗我部秦氏に仕え、2200石を領し、以後、長岡郡豊永山に

住んだという。この2200石が豊永郷にあたり、その豊永山こそ、現在、豊永城址のある山とはいえないだろうか。また、左近の子、藤兵衛も秦氏に仕え、父の遺跡を守ったと、系図に書いてある。そんな守るほどの遺跡なんて、私には豊永城としか考えられない。

ところで、藤兵衛は拓植村で一生を終え、そこには彼が祭ってあるそうだが、問題はその子、藤五郎だ。1600年、関ケ原の戦いで長宗我部家滅亡後、国外へ去ったと、一般には伝えられているが、わが家の系図によると、名を喜助と変え、本国吾喜郡安田村に住んでいたそうだ。なぜ、名前まで変え、国外へ去ったと見せかけたのか。たぶん、豊永城主の直系で、長宗我部家でも重臣だったからではないだろうか。あくまでも、私の推測だが。



⑤豊永快蔵

豊永家は、小笠原芳哲（豊永長清のこと）のころから代々、医者の家系で、それは少し前、馬太郎が若くして死に、男子が断えるまで続いた。その中で、一番高知に功績を残した人といえば、この豊永快蔵である。彼は高知に初めて種痘をもたらしたわけだが、彼の一生は、あらまし次のとおりである。

1827年、高知の須崎にて生まれる。医を志し、高知水通町横山家の門に入る。1849年23才のときには大阪に上り、筋違橋通大豆場町、蘭医原佐市郎の門に入り、オランダ医学を学ぶ。そして、種痘の人命救助における大切さを聞き、その方に名声のある佐市郎より種痘法を伝受し、同年3月痘苗をもち、帰国する。途中、大暴風にあい、遭難するが、種痘の道具だけはしっかりかかえ、阿波夷浦に上陸。滞船は7日に及び、痘苗の腐敗することを恐れた快蔵は、ついに陸行。約20日かかって家についた。その翌日から、さっそく親戚知己の子どもたちに種痘を行い成功。以来、十数年間で、施行者は数千人に及んだ。1863年、彼は高岡郡種痘御用役にとりたてられ、郡内各地に出張した。そのうち彼の名声は藩下にひろがり各地の医者が種痘法を習うために彼を訪ずれたが、彼はもったいぶることなく全員に伝授したという。1914年、88才で死去。彼は酒好きで酔うたびに「医者の薬料、遠山つつじ。とりにゆかれぬ、さきしだい」と、自作の歌を歌っていたそうだ。

⑥家紋

「丸に三階菱」
わが家の家紋

- 小笠原家……（基本）三階菱
- 三好家……釘抜
- 小笠原長光子孫……釘抜あるいは三階菱

Ⅳ 感 想

とにかく、とてもおもしろかったです。私にとってはちょっと背伸びしすぎたテーマだったかもしれませんが、この研究のおかげで歴史への興味が一段と深まったように思います。また、この研究をしているうちに、昔の人々が、私のすぐそばにいるような気がしてきて、時の流れの雄大さ、不思議さを、改めて考えさせられました。

一番苦労したところは、手に入れた情報の整理です。資料によって、てんでばらばらのことが書いてあるため、その取捨選択や、まとめに、大変とまどいました。そのため、資料が十分生かされていない場合が多く、とりとめのない研究結果になってしまいました。来年は、この点に気をつけ、もっと簡単なテーマを、より深く研究してみたいと思います。

★ 参考文献

「姓氏家系大辞典」　小笠原・加賀美・武田・豊永・三好……各条
「新編姓氏家系辞書」　小笠原・豊永……各条
「寛政重修諸家譜」　清和源氏義光流三好
「高知県の歴史散歩」
「土佐民間科学者傳」
高知新聞　S 43. 1. 17 ， S 45. 6. 3 ， S 51. 2. 3
豊永氏系譜 { 松村順徳樹謹記 / 豊永快蔵記（2編） / 祖母記 }
その他